



CONTENTS

- 01 入館者200万人達成!

- 02 プレスリリース

- 04 資料部研究報告

- 07 新任教員紹介

- 08 「宮澤・レーン事件」80周年特別展
～事件をめぐる“出会い”と“絆”をたどる～を開催

- 11 卒論ポスター発表会

入館者200万人達成！



200万人目となった栗野さん親子を囲んで記念撮影（左から司会の高田さん、山本理事・副学長、栗野さん親子、小澤館長）

この度、北海道大学総合博物館は、1999年4月の開館以来、23年目にして累計入館者数200万人を数えるに至りました。これまでご来館頂いた多くの皆様、当館の運営を支えて頂いたスタッフ、ボランティア、すべての関係者の皆様に、ここに厚く御礼申し上げます。

当館は、我が国基幹大学のひとつである北海道大学の大学博物館として、本学研究者や学生に留まらず、学術・教育分野の発展における社会からの使命と期待を広く担い、多くの皆様のご支援によって、開館以来着実に歩みを重ねて参りました。特に、2015年4月から1年余りを休館として行われた大規模な耐震補強工事、内装・展示施設の一斉、カフェと売店の設置、昇降機の設置をはじめとするバリアフリー化などによって、より安全で利用しやすく快適な施設に生まれ変わったことを契機に、年間入館者数はさらに増加し、新型コロナウイルス感染拡大直前の2019年度には、年間24万人近くの来館者をお迎えする施設になることができました。おかげさまで、広く国内外から札幌を訪れる方々にとって、当館はすでに見逃せない存在として認知頂けるようになりつつあります。

現在、当館は、約300万点の貴重な学術標本・資料を収蔵しており、その一部は常設展示として公開されています。これに加えて、期間限定で毎年開催される様々なテーマによる企画展示は、広くマスコミや出版などにも取り上げて頂くことで、多くの方々にご覧頂けるようになりまし

た。当館は、自然科学分野の標本所蔵を主とする大学博物館ですが、近年ではこの企画展示や教育活動などを通じて、総合大学（＝ユニバーシティ）の顔として、社会科学や人文学にも通じる知的分野への好奇心を高めるための啓発も担いつつあります。このような運営は、当館専任・兼任教職員だけではなく、60名程の資料部研究員、260名程のボランティアスタッフ、さらに多くの学外の皆様からのご協力に支えられています。多くの皆様からの共感とご支援を頂けることが、当館にとっては大きな励みになっています。

一方で、近年には、これまでになかったいくつかの試練を経験しました。2018年秋に起こった北海道胆振東部地震では、幸い当館は大きな被害に見舞われることはありませんでした。しかしながら、道内各地が地震による直接的な揺れの被害だけでなく、広範囲にわたって数日間の大規模停電や各種インフラの機能停止に見舞われたことは、人的・物的な安全性確保の必要性に加え、貴重な学術標本の収蔵のあり方を再考する機会となりました。また、2020年春から深刻化した新型コロナウイルス感染の世界的規模の拡大では、多くの人々が集まる公共の場として、感染回避のため安全性をいかに担保しながら、大学博物館としての研究・教育活動を継続しうかが課題となっており、この試行錯誤は現在でも続いています。近年、世界各地が様々な大規模災害に見舞われる中、大学博物館として

のレジリエンスを高め、社会インフラのひとつとして確かな存在になっていくことが、当館の使命であることを改めて感じております。

開館以来の累計入館者数が200万人となったこの節目にあたって、これまで以上に当館のスタッフが一丸となり、現代の知を広く横断的に担い、社会に貢献できる大学博物館として、さらに発展できるよう気持ちを新たに前に進んでいく決心を新たにしています。皆様には、引き続きご支援を賜りたく、今後とも北海道大学総合博物館をどうぞよろしくお願い申し上げます。

小澤丈夫

（北海道大学総合博物館長）

総合博物館は1999年4月に開館し、開館10年目の2009年10月には50万人、2014年7月には100万人の来館者を達成、2016年7月のリニューアルオープンを経てからは2017年度以降、年間20万人以上の来館者をお迎えしております。2020年以降はコロナ禍による3回の臨時休館期間もありましたが、開館22周年を迎えた12月16日（木）に来館者数が通算200万人を達成いたしました。

200万人目の来館者となったのは札幌市内在住の栗野桂くん（4歳）です。お母様と大人気の企画展示『トガリネズミ展』を楽しみに見に来ていたそうです。おふたりからは「トガリネズミを見ることもでき楽しかった。また総合博物館にきたい！」とコメントを頂きました。

200万人達成記念セレモニーでは小澤丈夫館長から200万人目の記念証書を、山本文彦理事・副学長からは、挨拶と大学院生が開発したミュージアムグッズを記念品として贈呈されました。司会はミュージアムマスターの高田健太郎さん（理学院博士1年）が務めました。

これからも総合博物館は感染症対策に十分留意し、みなさまのご来館をお待ちしております。

井上猛

（事務部係長）



山本理事・副学長より栗野桂くんへ記念品贈呈

プレスリリース

ワニ類の水棲適応の進化の鍵

吉田純輝

（福島県立博物館学芸員・北海道大学総合博物館資料部研究員）

小林快次

（研究部教授／古生物学）



アンフィコティルス・マイルシ復元画。©服部雅人。

2021年12月に「恐竜時代の地層からみつかったワニの祖先型化石を新種「アンフィコティルス・マルシ」と命名」という記者発表を、福島県立博物館・カナダのカールトン大学・群馬県立自然史博物館と共同で記者発表を行いました。私たちは、共同研究を行いその研究成果をRoyal Society Open Science誌（英国王立協会）に論文を出版しました。この研究は、現在福島県立博物館吉田純輝学芸員のリードにより達成されたものです。吉田学芸員は、北海道大学理学院にて博士号を取得し、現在北海道大学総合博物館の資料部研究員でもあります。

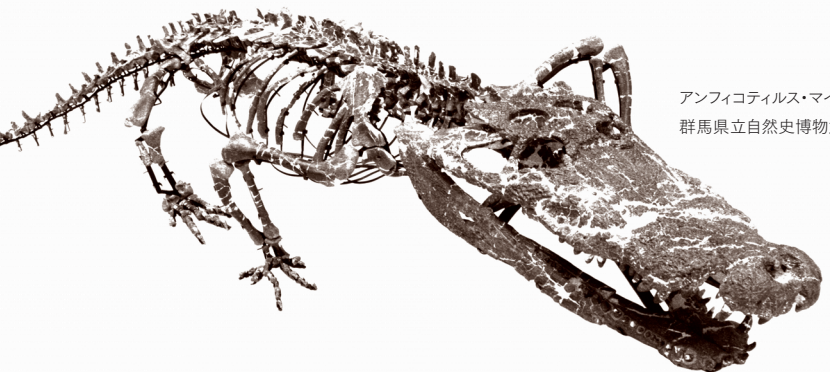
このアンフィコティルスという動物は、恐竜時代に生きていたワニで、ゴニオフォリス類というグループに属します。ゴニオフォリス類は、現生ワニ類の祖先系とも言われ、そのため、陸生だったワニ類の祖先が水辺へと進出する進化過程を知るうえで、きわめて重要視されています。

私たちが研究した標本は、1993年にアメリカ・ワイオミング州のジュラ紀後期（約1億5500万年前）の地層であるモリソン層から発見されました。標本は群馬県立自然史博物館に収蔵され、その後、福島県立博物館・北海道大学を中心とする研究チームは、このゴニオフォリス類の全身化石の研究を開始しました。

私たちの研究によって、このアンフィコティルス

の全身化石を詳細に記載し、北米を中心に他のゴニオフォリス類の化石と比較研究をしました。その結果、幅広い口先（吻部）や内鼻孔後方窩の存在など様々な特徴から、アンフィコティルス属の新種であることがわかりました。

さらに、私たちは、現生ワニ類にみられる水生適応が、古くジュラ紀のゴニオフォリス類まで遡れることを世界で初めて示しました。ワニ類にはワニ固有の「舌基弁」という舌の付け根に位置し、持ち上がることで喉に水が浸入することを防ぐ機構があります。ところが、化石に残らない組織であるため、その起源はまったく分かっていませんでした。私たちは、世界でも最上級に優れた保存状態の本標本の「舌骨」と「内鼻孔」に注目し、その起源を世界で初めて提唱しました。

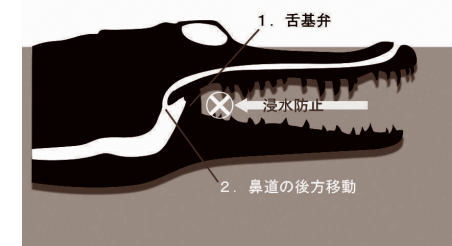


アンフィコティルス・マイルシの全身骨格。群馬県立自然史博物館提供。

世界中のワニ形類標本を観察し、舌骨のひとつである「角鰓骨」の形態計測をおこなった結果、現生ワニ類やゴニオフォリス類などを含む新鱗類の角鰓骨は頭部に対して相対的に小さく湾曲していたことを明らかにしました。同時に、ワニ形類の鼻道の後方化を知るため、鼻道後端の「内鼻孔」の位置を計測し定量化しました。その結果、新鱗類では内鼻孔の位置が後方へ延びていることも定量的に示しました。つまり「角鰓骨の縮小化」と「内鼻孔の後方移動」がみられる新鱗類は、すでにワニ固有の「舌基弁」機構の必要条件を揃えていたことを明らかにしたので

す。これらの結果から、現生ワニ類固有の「舌基弁」という水生適応のための呼吸システムは、ゴニオフォリス類を含む祖先的新鱗類において、ジュラ紀後期以前に、既に可能であったことが初めて明らかにしました。また、生理学的適応（舌基弁）が、現生ワニ類にみられる運動的水生適応（背側皮骨の多列化や脊椎の後凸化）に先行して獲得されたことが判明しました。

本研究はワニ類の進理解における重要な成果ですが、いまだ謎は多く残されています。本研究では北米の化石が中心となりましたが、ワニ類や他の脊椎動物の化石は、福島県や北海道などの地層からも発見されています。今後、日本やアジアでの調査研究が未解決の問題を解く鍵になるかもしれません。



ワニ固有の浸水防止機構「舌基弁」。ワニ舌の付け根に位置し、持ち上がることで喉に水が入ることを防ぐ。舌基弁を閉じて、喉付近までのびた鼻道によって鼻と喉はつながったままなので、鼻を水上に出せば水を誤飲することなく呼吸ができる。

プレスリリース

世界最古の家禽はガチョウ!? —約7000年前の中国の遺跡でガン類の家禽化の証拠を発見—

江田真毅

(研究部教授/動物考古学)



現代のシナガチョウ

鳥類を家畜化した家禽は、ニワトリを筆頭に世界中で飼育されています。近年、その総個体数は哺乳類家畜の5倍にも達します。しかし、家禽の歴史にはこれまであまり関心が寄せられてきませんでした。私たちは、中国・長江下流域の約7000年前の稲作農耕集落である田螺山遺跡から出土したガン類の骨の調査から、当時ガン類が家禽化されていた複数の証拠を発見しました。

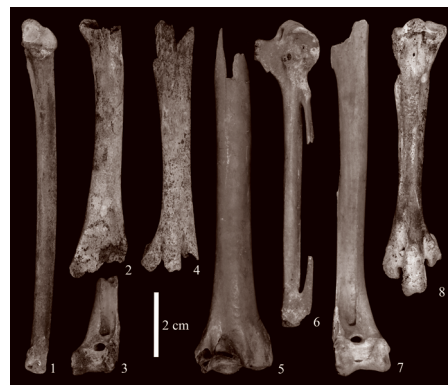
組織学的証拠: 長江下流域は現在もガン類の越冬地ですが、繁殖地ではありません。それにもかかわらず、田螺山遺跡から出土したガン類の骨232点中4点が骨化の完了していない若齢個体のものであることが分かりました。これらの骨を国内外の博物館に収蔵されている週齢が既知の標本と比較した結果、4点のうち1点は特に若く、越冬地に渡ってきた個体のもとは考えられないことが分かりました。

地球科学的証拠: 飲み水として摂取した地域の水の値を反映する骨のリン酸塩の酸素安定同位体分析を実施し、他の幼鳥の骨も現地で生まれた個体といえるかを調べました。また、この分析をガン類の成鳥の骨に対しても実施し、現地生まれの成鳥が含まれるかを検討しました。その結果、分析した2点の若齢個体の骨も

繁殖地から飛来した直後の個体とはみなせないこと、成鳥にも現地で生まれと考えられる個体が含まれることが分かりました。

生物学的証拠: 摂取した食物によって変化する骨コラーゲンの窒素・炭素安定同位体分析を実施しました。その結果、現地で生まれたガン類の成鳥は、渡りをしてきたガン類とは食性が異なることが分かりました。現地生まれのガン類は窒素の安定同位体比が高く、水田で栽培されたコメを食べていた可能性も考えられました。

形態学的証拠: 現地で生まれたガン類の成



田螺山遺跡で確認されたガン類の幼鳥(1-4)と現地生まれの成鳥(5-8)の骨

鳥は、長江下流域で越冬するサカツラガン、ハイイロガン、ヒンクイといった種と同程度の大型のガン類であり、また現生のガン類各種と比べて大きさが均質であることがわかりました。これは、現地生まれの鳥が数世代にわたって野生個体から隔離されていた可能性を示すものと考えられます。

さらに、現地で生まれたガン類の骨5点を対象に実施した放射性炭素年代測定では、これらの骨が遺跡の年代と一致した約7000年前のものであることが確認されました。これらの多角的な証拠から、私たちは約7000年前に田螺山遺跡でガン類が飼育されており、家禽化の初期段階にあったと結論付けました。

家禽化されたガン類であるガチョウの歴史は、墳墓に描かれた様々な色のガン類の画像に基づいて、約3500年前のエジプトに端を発すると考えられてきました。私たちの研究成果はこれを約3500年遡るものであり、ガン類飼育の歴史がより長かったことを示すものと言えます。また、ガン類飼育の起源地がエジプトではなく中国南部にあった可能性も示しています。さらに、現在最も普及している家禽であるニワトリの飼育も確実な証拠は約4000年前以降と考えられており、今回の成果は家禽の歴史も大幅に更新するものです。

これまでの研究によって田螺山遺跡で大型のガン類が飼育されていたことは分かりました。しかし、飼育されていた種はわかっていません。今後、古代DNA解析によって種を特定する予定です。また、今回発見したガン類の家禽化の流れが現在のガチョウにつながるのか、それとも現在のガチョウにはつながらず途絶えたのかなど、様々な研究の発展が期待されます。

書誌情報:

Eda, M., Itahashi, Y. et al. 2022. Multiple lines of evidence of early goose domestication in a 7000-yr-old rice cultivation village in the lower Yangtze River, China. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America* 119: e2117064119.

資料部研究報告

“Boys, Be Ambitious!” 北大の解釈

藤田正一

(名誉教授)

1915年、サンフランシスコ万博の際、米国が日本の国立大学に寄与した貢献として札幌農学校のことを紹介した小冊子、A Historical Sketch of The College of Agriculture, Tohoku Imperial University: What America has done for a Japanese Government Collegeに“Boys, Be Ambitious”という言葉でクラーク博士が伝えたかったメッセージの説明が記載されています。“Boys, be Ambitious!” Be ambitious not for money or for selfish aggrandizement, nor for that evanescent thing which men call fame. Be ambitious for knowledge, for righteousness, and for the uplift of your people. Be ambitious for the attainment of all that a man ought to be. This was the message of William Smith Clarkこれが北大が公式に発表した“Boys, Be Ambitious!”の最初で唯一の解釈であると思います。『『青年よ、大志を抱け』、金銭や私利私欲や、人が名声と呼ぶようなはかないものに対してではなく、知識や正義や人々の向上のために、そして、人としてのあるべき究極の姿に到達できるように、青年よ大志を抱け。これがクラーク博士のメッセージであった。』当時の風潮の立身出世ではなく、知識、正義、社会への奉仕、人格の完成を大志の目標とした教育精神をここに見ることが出来ます。すなわち、“Be Ambitious” は立身出世に代わるもう一つの青年の生き方の指針を示したものでありました。この小冊子は当時東北帝国大学農科大学(北大)の英語教師だったポール・ローランドが監修した冊子編集委員会によるものです。それで、これはローランドの言葉とされて引用されることが多く、羊ヶ丘展望台のクラーク像脇の銘板もその一例です。

ところが、これより17年前の1898年、札幌農学校の学生だった有島武郎が作詩した遠友夜学校校歌に、これと同じ精神が具体的な例を示すことで歌い込まれているのです。遠友夜学校とは、当時札幌農学校の教授だった新渡戸稲造夫妻が私財を叩いて、昼間働いていて小学校にも通えない貧しい子供達や晩学者のために開校した授業料無料の夜学校です。札幌農学校の学生が無償で教育にあたりました。有島

武郎もそんな学生先生の一人でした。彼が作詞した校歌の1番から9番までの歌詞を要約すれば、「人生の目的は富、名声、地位ではなく、綺麗な衣装や美酒や、豪邸でもない、正義と善の実行、聖人の教えや大人と交わり自己研鑽すること、曇りなき心で生きること」となります。当時このような精神が札幌農学校の校風としてすでにあったことを物語っています。こうなると、前述の冊子の文章は、ローランドの言葉というよりは、札幌農学校に通底する精神をローランドが代弁した、あるいは、別人が記載し、ローランドは単にその英訳あるいはそれを監修したということである可能性が高くなります。また、このような解釈はキリスト教的解釈で後付けだという議論がありますが、クラーク博士は学生時代に回心を経験した熱心なキリスト教徒ですから、彼自身の考えであったとしても矛盾はありませんし、キリスト教的な解釈がむしろ妥当であると言えます。

事実、Boys, Be Ambitious!を直に聞いた一期生、それを伝え聞いた二期生たちが、すでにこの言葉を、前述の冊子に記述されているような解釈で受け取っていたことを伺わせる記述があります。内村鑑三の日記:1919(大正8)年6月8日(全集39、119)には「・・・会后、伊藤一隆と共に銀座に会食した。四十年前の信仰の友と中央に在りて共に主の聖名の為に働くに至りしは大なる摂理であり、大なる感謝である。我ら談話の標語は故クラークの遺せしBoys, Be Ambitious(青年よ大志を懐けよ)であった。我らは主のために大志を懐き大事を為すであろうと語った。実に愉快である。」という記述があります。伊藤一隆はクラークとの別離の場に居合わせた一期生。この言葉を聞いていなければこのような会話は成り立たないことは自明です。そして伊藤一隆の娘(松本恵子)は「クラーク博士と私の父」(『新文明』第6巻 第12 (昭和31年12月1日)号 pp26-31)の中で、「このアンビシャスという英語は、日本では野心家とか野望家とかいう悪い意味に訳されているが、実はこれは向上心を持つとか大きな志という意味で、クラーク博士がここで『大志を抱け』と言われたのは、日頃学生たちに私利私欲を離れ、人間の小さな立身出世などにとらわれず、常に何かしら人類に貢献するような高い目標に向かって進

み、神の前に人間として正しい優れた生き方をするように教えていられたので、それを指しているのであると父は説明してくれた。」と書いています。また、二期生の新渡戸稲造の弟子、河合栄治郎は新渡戸より「最も価値あるものは、名誉でも富でもなく、また学問でも事業でもなく、彼の人格にある」ということを教えられたと回想しています(全集第17巻「学生時代の回想」p 157)。

クラーク博士の意図は単に「頑張れよ」程度だったのかもしれないという人もいます。しかし、受け取る側はその言葉の中に深い意義を見出そうと考えたようです。クラークの去った1877年-1878年の1年余りの間、学生たちの討論集会・開識社の演題にAmbitionに関わるものが4題記録されています: Ambition and Self-Control (小野兼基1877)、The Importance of Ambition (内田澁1877)、True Ambition (出田晴太郎1878)、そして極め付けが「志欲大なるべし」(永井於菟彦1878)です。それぞれのディスカッションの内容は記述されていないので、どのような論議があったのかは不明ですが、一期生たちが、クラークの別れの言葉を真剣に考えたことの証でしょう。ここで、最後にあげた永井於菟彦の「志欲大なるべし」について考えてみましょう。仏教で、欲に2種類あるとされています: 五感の快楽を得ようとする欲(渴愛)と、善をなさんと欲する欲(志欲)です。志欲は創造的で啓発された、能動的に善をなさんとする欲求です。まさにクラークいうところのLofty Ambitionではありませんか!「志欲大なるべし」はBe Ambitiousの最初の日本語訳である可能性があります。

例えクラークが意図しなくても、彼の別れの言葉は、彼の教え子によってこのように解釈され、それ故に克己心を持った若者たちが、大いなる志欲を持って社会に貢献する人物となっていったのです。Ladies and Gentlemen, Be Ambitious!

脚注:

永井於菟彦 裕福な士族の出。好漢だった。開識社で「志欲大なるべし」を主張したが、渴愛の欲に負けてしまった。友人(上級生を含む)を誘って薄野遊びをするうち金が足りなくなる。次の送金まで借りつもりで、宿舎の金庫から金を盗み薄野で豪遊。佐藤昌介に咎められ、自白、自首。10年の実刑

資料部研究報告

資料部での活動

堀口健雄

(名誉教授)

図1. 3階の展示室にて展示されている広義の植物(陸上植物+全藻類)の進化過程を解説するパネル。二次共生というメカニズムが発動されたことにより、もともとは植物とは縁の無い生物が葉緑体のオーナーになった過程を示している。

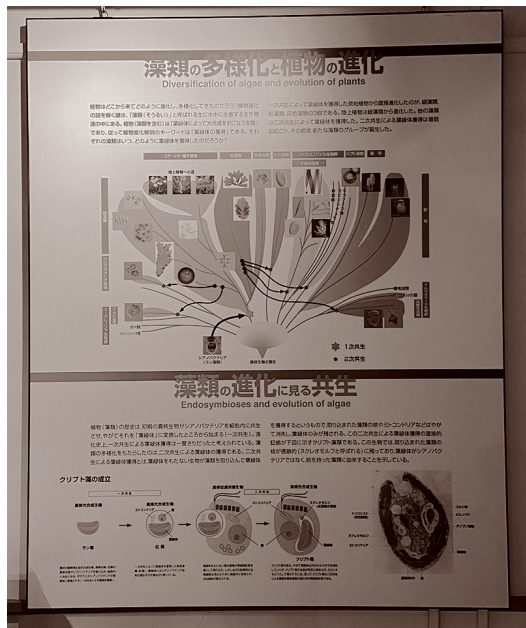


図2. 3階の展示室にて展示されている渦鞭毛藻類の形態の多様性を示すパネル。「単細胞生物≠単純」ということがおわかりいただけるであろう。



総合博物館では永らく資料部研究員を務めさせて頂きました。この3月に大学を定年退職するのに合わせ、研究員も辞めさせて頂くことにしました。研究員を辞するに当たって博物館に関わった活動などをいくつか述べさせていただきます。

私は一貫して「単細胞の藻類」(=微細藻類)を研究対象としてきました。微細藻類に対する語は大型藻類でワカメなどの肉眼で識別できる海藻類を指します。ちなみに北大の海藻の腊葉標本のコレクション(略号SAP)は、世界でも有数のコレクションとして知られています。さて、微細藻類と言っても色々なグループがあり、私が主な研究対象としてきたのは、渦鞭毛藻類と呼ばれるグループです。渦鞭毛藻類は単細胞生物ながら大変興味深いグループで、気づけば40年余におよぶ研究生活の中ですっかり彼らに魅せられていたという訳です。彼らの種多様性を明らかにし、進化のシナリオを推定し、それらの葉緑体の共生進化の実体を明らかにすることが私の研究テーマでした。

博物館との一番の思い出は、総合博物館開館時の展示物決定の際のお手伝いでしょうか。まずは、予算など気にせず色々アイデアを出そうということで、海の中の海藻の林(海中林)の様子をライブ配信したらどうかなどと、ほぼ実現不可能なアイデアが色々出されましたが、結

局、私が授業で教えていた植物(広義の植物=陸上植物+全藻類)の進化のストーリーを葉緑体の共生起源の観点から解説したパネルが展示物の一つとして採用されることになりました。そのパネルは現在でも3階に展示されています(図1)。ランソウを起源とする葉緑体の共生起源説は広く知られていますが、藻類の進化はそれだけでは説明できない複雑なストーリーから成り立っており、思いの外ダイナミックな植物・藻類の進化のストーリーが展示物として相応しいと判断されたのかもしれませんが。このパネルを作るに当たっては、写真はオリジナルでということ、シャジクモの写真1枚のためだけに支笏湖まで出かけていったのも良い思い出です。その他にもう1枚私の提案したパネルが採用されておりまして、「単細胞生物=単純な生物」というイメージを覆したい思いで作製した渦鞭毛藻類の多様な形態を示す写真パネルです。こちらも未だに展示していただいています(図2)。これらの展示を通して来訪者には多少なりとも、植物・藻類の多様性、進化の不思議などに思いを馳せていただければと願う次第です。

博物館と標本は切っても切れないということ、単細胞生物の標本に関してですが、特に微細藻類を新種記載した場合のタイプ標本はしっかりと形態を保持した状態で保存する必要があります。これがなかなか難しく、どのような形でタイプ

標本を残すかはなかなか悩みどころです。結局、1)乾燥サンプルか、2)樹脂包埋の永久プレパラート、のいずれかの形でタイプ標本としてSAPのコレクションに収蔵いただきました(図3)。私の標本も歴史あるSAPのタイプ標本コレクションに加えることができて光栄に思っています。

博物館では、土曜市民講座やバイオメテイクス市民セミナーなどで講演をさせていただいたことも良い思い出です。また、外部評価委員や運営委員なども務めさせていただき博物館とは何かと縁のある教員生活でした。今後益々総合博物館が発展されることを祈念しつつ、退任にあたってのご報告とさせていただきます。

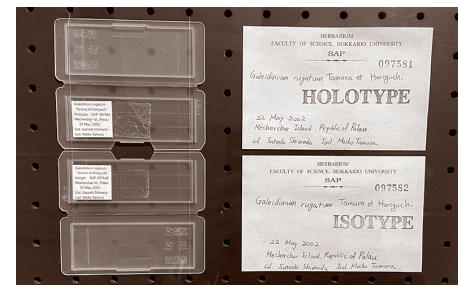


図3. 3階の展示室にて展示されている著者作製のタイプ標本(永久プレパラート方式)の例。

資料部研究報告

アポイ岳のかんらん岩を調べて、地球マントル進化史をさぐる!

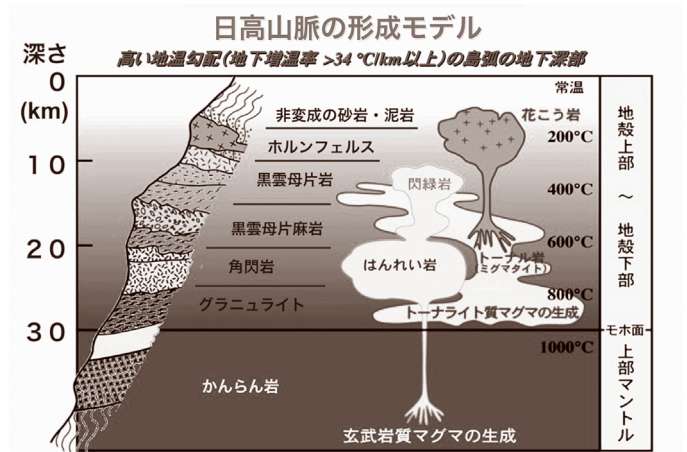
新井田清信

(地学ボランティア)

ごらん、アポイ岳のかんらん岩だよ!北大総合博物館の正面玄関前に、かんらん岩の門標(看板石)があります。その裏面には、「玄武岩質マグマのふるさと『上部マントル』の岩石、日高山脈ができたときに、地表まで押し上げられた。主にオリブ色のかんらん石からなり、斜方輝石(褐色)・単斜輝石(緑色)・スピネル(黒色)を含む。」と、書かれています。綺麗で、新鮮で、鉱物がよく見えます。上部マントルから持ち上げられた時に蛇紋岩に変質していないので、貴重な地球深部情報が保持されているのです。その岩体はとても大きく、多彩なタイプのかんらん岩からできています。多くの研究者たちに注目され、世界的に有名なかんらん岩です。

日高山脈の変成岩や深成岩が高温高压の地殻深部でつくられた5,500万年~1,800万年前、さらに深部の上部マントルでも大規模な部分融解が起こってマグマが発生しました。最近、かんらん岩内部のマグマ通路の絶対年代測定が行われ、52±19 Ma (約5,200万年前)の輝石Rb-Sr同位体年代が報告されました。金雲母脈ができた約2,300万年前のK-Ar年代の報告もあり、その頃、日高山脈の地下深部では島弧のように高温で活発なマグマ活動が起こっていたことがわかります。

地球スケールでマントルの進化史を考えると、島弧活動よりも前のことが知りたくなります。アポイ岳の島弧前のかんらん岩については、初源的なマントル組成を残すタイプの斜長石レルゾライトを調べました。鉱物コアの部分は島弧活動の影響を受けておらず、中央海嶺のかんらん岩に特有な地球で最も潤滑した同位体組成をもっていました。地球化学分野の人たちの成果でした。そのSm-Nd年代は、島弧ステージよりも格段に古い1.15±0.035 Ga(約11億5000万年前)。Os-Re年代でも、1.12±0.24 Gaの報告があり、アポイ岳のかんらん岩は11~12億年前には中央海嶺の上部マントルだったと考えられます。地球表層にロディニア超大陸ができていた頃の話です。ここで、さらに地球創成期に近い、もっと古い時代のマントル情報を紹介します。最近、北京の李毅兵さん(中国科学院地質学研究所)や山本伸次さん(横浜国立大学)たちが、チベットのかんらん岩からダイヤモンドやジルコン・ルチルなどの古い大陸起源の鉱物を発見しました。やは



北大総合博物館3階の展示標本(日高山脈の岩石)の解説パネル。東西地質断面図(左)を地下深部まで回転し、右側のモデル図が描かれている。

り、この際、世界で一番研究されているアポイ岳のかんらん岩の「ジルコンU-Pb年代」を調べてみよう!と、いうことになり、大がかりな共同研究を始めました。まず、東邦オリビン工業の採石場から主要なタイプのかんらん岩を2つ(それぞれ1トン)採取し、北京の研究所に送り、鉱物分離の作業をしました。ダイヤモンドは12粒、ジルコンやルチルはそれぞれ1000粒以上回収できました。大きな成果でした。最も古いジルコンのU-Pb年代は、3439.7±83.1Ma(34億3970万年前)。なんと、太古代の年代です。地球で最も古い初源大陸ができた頃の花崗岩のジルコンです。これが初源マントル内部に持ち込まれて滞留し、地球マントルは循環しながら進化したと考えられます。



北大総合博物館の門標かんらん岩(左)と裏面に刻まれている簡単な解説文(右)

新任教員紹介

●北野一平

(研究部助教/岩石鉱物学)

2022年3月に北海道大学総合博物館に岩石鉱物学分野の担当として着任しました。熊本生まれで福岡育ちの九州男児です。九州大学で学士(理学)・修士(理学)・博士(理学)を取得し、その後2021年3月まで九州大学で学術研究員または特任助教として勤務しており、それまで福岡県外に住んだことはありませんでした。そんな私ですが、2021年4月からの栃木県立博物館での勤務を経て、北海道大学総合博物館に採用していただきました。周囲の方からは、名前の通り、北の大地に向かうんだねと言われて運命的なものを感じながら赴任しました。

さて、前置きが長くなりましたが、私の専門は地質学、岩石学、地質年代学で、私たちの大地をなす岩石や地層の成り立ち・地史を明らかにする学問です。特に、ヒマラヤ山脈の直下で生じているような大陸地殻の衝突や、日本列島の直下で生じているような海洋地殻の沈み込みなどで形成される、「変成岩」という岩石を主な対象

としています。調査地域での広域的な野外調査(岩石採取、産状・組織の記載など)と、採取岩石試料を切断・研磨して作製する薄片の偏光顕微鏡下での詳細な観察を研究の基盤としています。主要な鉱物の化学組成分析や岩石そのものの化学組成分析、年代測定などの多角的な分析を通して、変成岩に記録されている大陸または島弧の成長過程を解明する研究を行っています。これまでスリランカや南極、日本国内各地を調査し、第58次・第60次日本南極地域観測隊に参加した経験があります。北海道には、日高山脈をなす日高変成帯の調査や大雪山旭岳の登頂などで訪れたことがありました。日高山脈は非常に思い出深い場所で、私の地質学と変成岩石学の原点になっています。九州大学の小山内教授にお誘いを受けて日高変成帯の調査に参加し、常にヒグマの出現を恐れながら、初めての地下足袋を履いて沢・林道沿いの調査を行い、地質調査のいろはを教わりました。余談ですが、私は赴任するまで北海道大学総合博物館には訪れたことがないと思っていました。しかし、日高山脈での調査写真を探しているときに、調査前の札幌市内の観光で北海道大学総合博物館に来館していたことが判明しました。この場を借りて、赴任が初めての来館とお伝えし

てしまった諸先生方にお詫び申し上げます。

北海道大学総合博物館では、これまでの調査・研究の経験だけでなく、栃木県立博物館での企画展示・講座や観察会などの一般市民向けの普及教育事業に携わった経験を最大限に生かして、運営業務に努めます。研究では、これまでの研究に加えて、日高変成帯をはじめ北海道に分布する変成岩および関連する深成岩の調査・研究を展開し、北海道の地史の鮮明化を目指します。教育では、学部・大学院の講義の担当や、博物館独自の教育プログラム(ミュージアムマイスター認定コース、卒論ポスター発表会など)に携わり博物館の強みを生かした教育に寄与していきます。社会貢献活動では、4月に新設した地学ボランティアをはじめ、ボランティアの方々と協力して岩石・鉱物・鉱石標本の整理・登録作業、地学関連のパラタクソノミスト養成講座や展示、イベントを進め普及教育活動にも努めます。

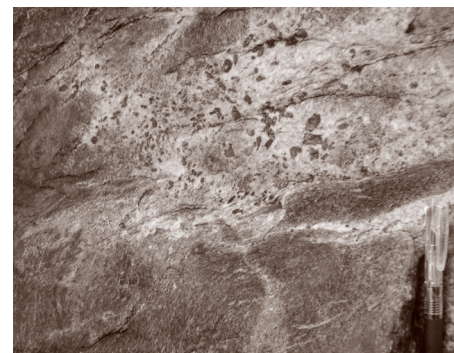
着任して約2ヶ月が経ちましたが、まだまだ分からないことだらけで、総合博物館の教員・事務職員、研究員、ボランティアの皆様には何かとご迷惑をおかけするかとと思いますが、少しずつ仕事をこなしていきますので今後とも宜しくお願い致します。



写真左 南極での調査の様子。写真手前の人物が北野。

写真右上 スリランカでの調査の様子。写真左の人物が北野。

写真右下 日高変成岩。白色部は岩石が溶融した部分(メルト)で、自形の直方(斜方)輝石(黒色で長方形の形をしている粗粒な鉱物)を含む。



「宮澤・レーン事件」80周年特別展 —事件をめぐる“出会い”と“絆”をたどる—を開催

●2021年12月4日～2022年1月30日



展示開催のテープカット
(2021年12月4日)
右から
小澤丈夫総合博物館長
山本文彦理事・副学長
山本玉樹氏、唐渡興宣氏

総合博物館・大学文書館が主催し、「宮澤・レーン事件を考える会」(代表幹事:山本玉樹氏、唐渡興宣氏)の協力を得て、「宮澤・レーン事件」80周年特別展」を総合博物館1階企画展示室で開催しました。

「宮澤・レーン事件」は、1941年12月8日、アジア・太平洋戦争開戦の日、特別高等警察が諜報活動などの全国一斉取り締まりを実施した際に、北海道帝国大学工学部電子工学科2年の宮澤弘幸、予科英語教師のハロルド・レーンとポーリン・レーンの夫妻が検挙の対象となった事件です。3人は裁判で懲役15年、12年の判決を受けました。レーン夫妻はその後アメリカへ送還されますが、戦後再来日して、ハロルドは北大に復帰しました。一方、宮澤は終戦により釈放されるまで獄中生活を送り、釈放後も獄中で崩した体調が十分に戻らず27歳の若さで病死しました。1980年代後半に、弁護士上田誠吉が著書『ある北大生の受難』などで3人は冤罪であったと指摘しています。

今回の展示では、事件から80周年を迎えるに当たり、改めて資料によって「宮澤・レーン事件」を振り返りました。総合博物館は、2007年2月22日から4月30日まで「悲劇の北大生宮澤弘幸の「青春を綴じたアルバム」展」を開催しており、「宮澤・レーン事件」を取り上げた展示としては2回目となります。

展示した資料は、宮澤弘幸の実妹秋間美江

子氏からご寄贈いただいた宮澤弘幸旧蔵アルバム、3人の冤罪を指摘した上田誠吉の旧蔵資料、3人の諸活動を示す大学所蔵資料、「宮澤・レーン事件を考える会」提供の資料などです。展示資料86点、解説・写真パネル33枚で構成しました。

今回の展示では、「宮澤・レーン事件」の事実を軸として、宮澤弘幸とレーン夫妻の諸活動を示す資料から3人の人物像を紹介することを意図しました。来日する以前にハロルドが良心的兵役拒否者として行動していたこと、日本で生まれ育ったポーリンが日本人や日本文化を深く理解していたこと、在学中の宮澤の文芸創作や旅行・登山などの活潑な活動、宮澤ら北大生がレーン夫妻ら外国人教師たちと「ソシエテ・デュ・クール」(心の会)を結成して国際性に富んだ友好を育んだ様子などです。また、釈放後の宮澤が北大復学の意思を示しアメリカ留学を計画していたこと、上田誠吉が事件を明らかにするために行った調査、秋間美江子氏による事件を語り継ぐ活動、秋間氏の活動を支援する市民運動の広がり、北海道大学取り組みなども資料で示しました。

市民や学生、レーン夫妻をご存じの方々、事件に関心をお持ちの方々など、多くの観覧者に展示をご覧いただきました(展示期間中の総合博物館入館者数は10,720名)。事件を知る秋間美江子氏は2020年10月に逝去されていま

す。こうした折にこの展示を多くの方々に見ていただくことができたことは意義深いと思います。

今後も総合博物館・大学文書館では、事件や関係する人物についてさまざまな視点、立場から検証できるよう、関係資料の保存、活用に努めてまいります。

井上高聡

(大学文書館・准教授)



展示の一部の様子



展示観覧の様子

「小さなちいさな哺乳類 トガリネズミ展—今年もみせます」

●2021年11月30日～12月12日

トガリネズミの展示企画はこれで5回目となります。これを機に毎年の恒例企画とすることになりました。北海道には4種のトガリネズミ類が生息していますが、今回の生体展示はヒメトガリネズミ、オオアシトガリネズミとジャコウネズミが主体で、一日だけ「スター」のチビトガリネズミ(トウキョウトガリネズミ)も展示しました。展示個体の多くは北大との共同研究で札幌市円山動物園で飼育されているものです。

2021年には報告者らのグループが世界で初めてヒメトガリネズミの出産から離乳までの飼育に成功しました。また、協力者の河原敦さんのグループも世界で初めてチビトガリネズミの出産例を観察しました。どちらもマスコミに取り上げられネットで話題になったので、市民のトガリネズミに対する関心が高まっているところでちょうどよい開催となりました。

標本類の展示の他に、ポスター展示としてヒメトガリとチビトガリの出産から離乳までの飼育報告と、今回後援をいただいた東海大学での音声の研究についての結果も掲示しました。

COVID-19の影響のために積極的な宣伝はしませんでした。それでも見学のために多くのかたが訪れました。期間中にちょうど到達した200万人目の博物館訪問者の少年はトガリネズミを見に来たそうです。企画最終日には知の交流ホールとオンラインにて、河原敦さんと円山動物園の本田直也さんにそれぞれチビトガリとヒメトガリの出産と飼育についての講演を行っていただきました。

前年度は展示中に死亡する個体が多かったという反省から、展示には特別ケージではなく普段飼育しているケースを用い、また数日間隔の展示ローテーションをおこなったところ死亡個体は皆無となりました。今回は8名の北大の学部生と院生に飼育ボランティアとして協力していただきました。ミュージアムショップでもトガリネズミグッズも作成・販売してもらいました。

大館智志

(資料部研究員/低温科学研究所助教)



世界で初めて確認されたヒメトガリネズミの出産直後の新生仔。



関連企画の講演会で講演中の本田直也氏(円山動物園)。講演の様子は博物館の映像アーカイブ(YouTube)に保存されています。

<https://www.youtube.com/watch?v=wf71Qda30TY>

バーチャル恐竜博物館

●2022年2月23日

2月23日に、オンライン講座「化石と旅する世界—モンゴルと日本をつなぐ—」をオンライン配信をしました。この講座は、文化庁「博物館等の国際交流の促進事業(実施事業)」による「デジタルアーカイブデータを活用したバーチャル恐竜博物館による国際交流」の事業の一環でした。この企画は、世界中にある古生物の化石標本をデジタル化し、オンラインで世界中に情報を発信するものです。新型コロナの状況でも、デジタルを通して、研究や教育といった活動が活発に行われるように企画されました。群馬県立自然史博物館が中心となり、北海道大学総合博物館以外にも、むかわ町特別博物館や北九州市立自然史・歴史博物館も参加しました。それぞれ、カナダやアメリカ、中国、モンゴルといった国々と共同でイベントを行いました。

この配信では、当館1階のカフェにて、岡山理科大学生物地学部の千葉謙太郎講師、筑波大学生命環境系の田中康平助教と北海道大学総合博物館の小林快次教授の3人が、モンゴ

ルで栄えた恐竜について解説しました。北海道大学理学院の院生でありミュージアムマスターでもある高田健太郎君が司会をつとめました。千葉講師には、モンゴルの格闘恐竜と呼ばれる、プロトケラトプスとヴェロキラプトルについて解説をしていただき、田中助教には恐竜の卵についてお話をいただきました。小林教授は、モンゴルから発見された Deinonychus について解説を行いました。この配信に合わせて、多くのモンゴルの恐竜化石を3Dスキャンし、全身骨格がデジタル化されました。これらのデジタル化された3D画像を使って、私たちは恐竜を詳しく説明しました。

この配信が、大雪と重なってしまい、参加の先生方の参加が危ぶまれましたが、なんとか無事開催されました。参加していただいた千葉先生と田中先生は、北海道大学で学位を取得しています。OBの先生方が、こうやって当館でイベントができるのは貴重なことです。そして、ミュージアムマスターの高田君は、立派に司会をしてくれました。今後も、彼らと一緒に恐竜の研究や普及を盛り上げていくのを楽しみにしてください。

小林快次

(研究部教授/古生物学)



川本真奈美氏提供、左から司会をした高田君、筑波大学の田中先生、岡山理科大学の千葉先生、筆者

アイヌ・先住民研究センター展示替え

2021年10月、新型コロナウイルス感染症の緊急事態宣言が解除され、北大総合博物館が開館(再開)されました。そのタイミングに合わせて、当館2階「北大の探求心」のアイヌ・先住民研究センター展示ブースも展示替えをおこないました。当センターは、アイヌ民族が暮らしてきた大地に立地する教育研究機関として、目指すべき「ダイバーシティとインクルージョン(多様性と包摂)」のあり方を考え、発信の手段として博物館展示を重視しています。当センターには本展示を準備するための研究プロジェクトがあり、毎年展示替えをおこなっています。これまで、アイヌ語地名、ツーリストアート、パブリック考古学に関する展示をおこなってきました。

今回の展示は『台湾原住民族×グラフィックデザイン——順益台湾原住民族博物館所蔵・学生創作ポスター展』です。台湾の順益台湾原住民族博物館の協力を得て実現しました。紺色を基調とした展示空間に、台湾の大学生が現地の先住民族文化(台湾では原住民族文化と記されます)をテーマに創作したポスター85作品を

展示しています(一部はモニタによるデジタル展示)。また、台湾の先住民族文化に関わる商品なども展示しています。

順益台湾原住民族博物館によるポスター展は、台湾における先住民族文化への幅広い理解を促進するために、先住民族だけでなく非先住民族の学生からの出品も認めています。しかし、先住民族ではない人々が、先住民族の文化的知識に関わる新たな作品や商品の創作をおこな

う際、そこには様々な可能性が開かれると同時に多くの課題も生まれてきます。今回の展示は、国や地域によって先住民族文化への認識や扱いが異なることを伝えるとともに、それぞれの現場における将来の活動を考える際のヒントを与えてくれます。

近年、アイヌ文化に対する関心が高まっています。本展示をきっかけに、北海道そして世界における多様性の尊重とその課題について考えていただくと幸いです

山崎幸治

(アイヌ・先住民研究センター/准教授)



展示の様子(山崎幸治撮影)

COIブース「芳醇へと続く回廊～たわわに実る北海道のブドウ畑への誘い～」・ワインと食のサイエンスカフェの開催報告

近年、北海道内のワイナリーの数は50を超え、ワイン産地として注目されています。その様なワイン産地の持続性を高めるために、北海道大学では2015年から北海道経済部と連携してワインに関する教育研究を進めてきています。2021年4月には道内企業の寄附金により寄附講座「北海道ワインのヌーヴェルヴァーグ研究室」が大学院農学研究院に設置されました。この研究室の使命の一つとして、北海道産ワインの魅力の一般向けの発信があります。2022年2月末から、「芳醇へと続く回廊～たわわに実る北海道のブドウ畑への誘い～」と題した展示を行っています。これは、360°カメラで収録した北海道のブドウ畑の画像を、博物館内の3面のプロジェクターで投影することにより、あたかも収穫間近のブドウ畑の中に迷い込んだ感覚になる没入体験ブースと、北海道のブドウ畑やワイナリーを紹介するパネル、ブドウ畑土壌標本などを展示しています。また、2022年3月19日には、「第1回ワインと食のサイエンスカフェ」を北海道

大学総合博物館知の交流スペースで開催しました。これは、北海道産ワインを家庭の食卓で楽しむためのサイエンスを、レシピとペアリングするワインともに提供するイベントです。記念すべき第1回は、「大豆×道産ワイン×健康」と題して、石塚 敏 北大農学研究院教授による家庭の食事と未病との関連に関する講演、阿部真久氏(NPO法人ワインクラスター北海道代表理事・シニアソムリエ)による家庭料理とワインのペアリングに関する講演、川端美枝氏(イタリア料理イル

ピーノ オーナーシェフ)による、大豆や大豆加工食品を使った家庭料理3品のレシピの紹介を行いました。現地で30名、オンライン116名の参加者がありました。これらの展示、サイエンスカフェはこれからも継続して開催していく予定です。

曾根輝雄

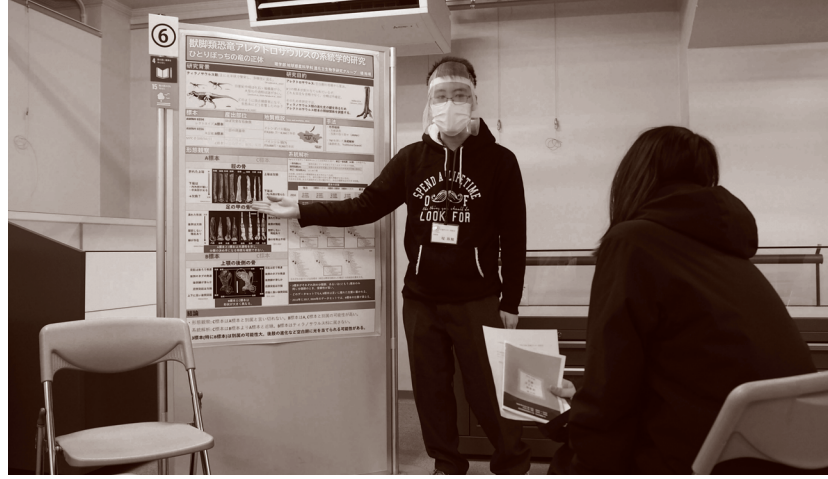
(農学研究院/教授)



360°カメラ画像を使った、ブドウ畑の没入空間。普段立ち入る事のできない、ブドウ畑の景色を楽しむことができます。

2021年度卒論ポスター発表会

●2022年3月5日・6日

<https://www.museum.hokudai.ac.jp/education/museummeister/list/18239/>
<https://www.museum.hokudai.ac.jp/education/museummeister/list/18222/>

来場者に説明する4年生

北海道大学の学部4年生が卒業研究を1枚のポスターにまとめ、来場者にわかりやすく発表して質問に受け答えする「卒論ポスター発表会」を、3月上旬の週末2日間に館内のホールと企画展示室で開催しました。今年度で14回目となるこの取り組みは、当館が北大の全人教育の一環として展開しているミュージアムマイスター認定コースの社会体験型科目に位置づけており、コミュニケーション能力の涵養や異分野への関心の喚起、大学博物館への理解を深めることを目的としています。

発表には理学部4名と文学部2名、工学部1名、水産学部1名の8名が参加しました。1枚のポスターを完成させるまでに、3回の中間発表会に参加して、当館の担当教員の指導を受け、他の発表者や発表会を運営する学生とのディスカッションを重ね、そこで得た意見を参考にして改訂を続けました。さらにさまざまな来場者を想定した説明のリハーサルを行い準備しました。発表会当日は、最初は緊張しながらも、次第に来場者との対話を楽しみながら説明していました。

発表会の運営はさまざまな専攻・学年の11名の大学院生と学部生が担当し、学内・学外向けの2種類のポスターと、発表者のメッセージや発表に関連した展示情報などを掲載したプログラムを制作した他、発表会当日は受付や司会を務めました。今年度もコロナ禍での安全で快適な運営が求められました。昨年度の発表者で今年度は運営スタッフとして参加した和田知里さんをはじめ運営メンバーが検討を重ね、会場を2カ所設け、入場制限も考慮してコロナ感染症対策を徹底して運営されました。当日はメンバーが臨機応変に対応し、スムーズな運営を実現できました。

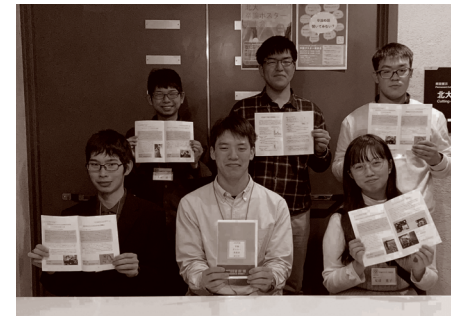
発表会の最後には、市民5名と本学教員3名から成る審査員の評価による「最優秀賞」、6名のミュージアムマイスターの合議による「ミュージアムマイスター賞」、SDGsへの貢献の可能性を評価する新設の「SDGs賞」、2日間の来館者の投票による「来館者賞」の表彰式と講評会を行いました。「最優秀賞」は理学部の堤裕規さんが、「ミュージアムマイスター賞」と「来館者賞」は理学部の東祐大さんが、「SDGs賞」は水産学部

の米子拓真さんが受賞しました。

来場者には、さまざまな学部の4年生の研究成果を知っていただく機会となりました。発表者と運営担当学生の事後考察レポートには、コミュニケーション能力を身に付ける機会になっただけでなく、卒業研究を見直したり、他分野の学生の研究を知ったり、来場者から有意義な意見をいただく貴重な機会となったことや、コロナ禍での発表会の運営を担った意義や課題などが綴られています。レポートや当日の様子は当館ホームページで公開しています。

湯浅万紀子

(研究部教授/博物館教育学)



広報や会場運営を担当した学生スタッフ

◎発表者

東祐大(理学部)
「カムイサウルスは美味しいのか!?
～ホネに空いた“穴”から探る生命の痕跡～」
阿部麟太郎(文学部)
「日本のエコミュージアム概念の拡張・発展に関する考察
～リヴェールの理念に立ち戻って～」
大村颯(理学部)
「恐竜の聴いていた音～化石から探る聴覚のひみつ～」
川本一陽(理学部)
「穂別産化石の正体は恐竜か鳥類か」
櫻井七海(文学部)
「京アニ事件での被害者実名報道は道徳的に正しかったのか?
～ジャーナリズムの倫理、プライバシー権、ケアの倫理からの検討～」
堤裕規(理学部)
「獣脚類恐竜アレクトロサウルスの系統学的研究
～ひとりぼっちの竜の正体～」
十塚響(工学部)
「Editorialにみる建築雑誌『VOLUME』の編集方針」
米子拓真(水産学部)
「環境DNA解析によって推定した分布北限域における
アユの生活史特性」

◎運営担当学生

安達寛子(生命科学院博士2年)、荒川大地(理学部1年)、大橋弘典・西山真(文学部1年)、工藤花未(法学部2年)、佐々木健太(水産学部2年)、土屋良(農学部2年)、寺西ほの花(経済学部2年)、堀井元章(総合化学院修士1年)、三井和・和田知里(文學院修士1年)

◎担当教職員

小林快次・湯浅万紀子・市来紗都子・渡邊洋子

「発掘! キャンパス・ミュージアム
～北海道大学の巻～」が放送されました。

古生物標本展示室にて(左から小林先生、優木まおみさん、田中直樹さん)

2022年1月8日にNHKBSプレミアムにおいて本館を特集した番組「発掘! キャンパス・ミュージアム～北海道大学の巻～」が放送されました。

この番組は2021年5月に放送された東京大学総合研究博物館に続き第2作目として本館に打診があり、番組制作に全面協力いたしました。また、取材収録の際は北方生物圏フィールド科学センター、大学文書館、附属図書館にご協力いただきました。



小林先生から恐竜の骨の輪切り試料の説明を受ける



ボランティアの岡野さんの作業説明風景



試料の説明をする江田先生

放送終了後には、視聴者から博物館に多くの反響が寄せられ、番組への興味、関心の高さがうかがえました。ご視聴いただいた皆様ありがとうございました。

今後、再放送やNHK地上波での放送も予定しているとのことで、まだご覧いただいていない方も機会がありましたら是非ご覧下さい。

NHKから90分番組全部、総合博物館を特集した番組を制作する旨の打診があった際、多くの皆様に総合博物館を知ってもらえる大きな機会と捉え、準備段階から全面協力させていただきました。

番組制作にあたり、教職員、学生、ボランティアスタッフの皆様には、準備から取材へのご協力、当日はご出演をいただき、お礼を申し上げます。

これからも総合博物館の魅力を広く知っていただくために、このような機会があれば積極的に関わっていききたいと思います。

井上猛

(事務部係長)



阿部先生からアインシュタインドームの説明を受ける

収録は2021年11月中旬に1週間程かけて行われ、11月14日にはタレントのコロコ田中直樹さん、優木まおみさんを本館にお迎えして、展示室、標本室等にて当館教員等が収蔵資料を前に熱く博物館の魅力をお話いたしました。タレントのお二人も教員の説明を興味深く熱心に聞いていただき、また、収録中以外にも多くの質問や感想を聞かせていただき、興味を持っていただいた様子がうかがえました。



牛舎をバックに記念撮影



会場風景

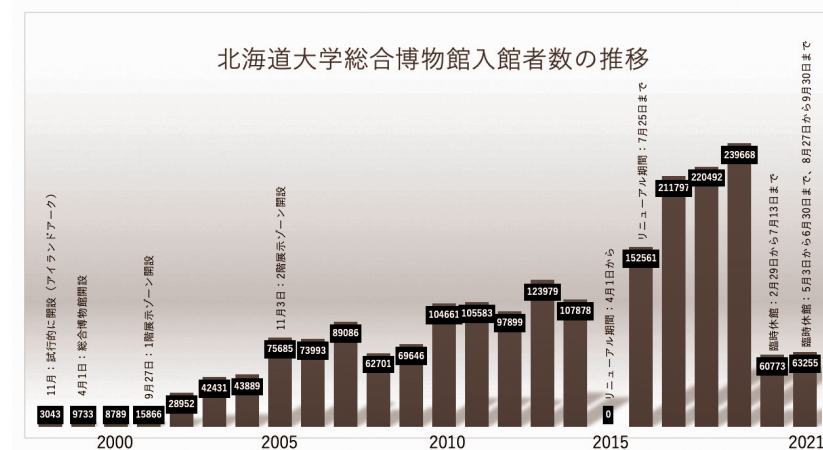
年次報告会

3月15日、オンラインで研究報告会が開催されました。年次報告会は、館長の挨拶から始まりました。画面を通して、年度末の挨拶と参加者にお礼の言葉をいただきました。その後、ボランティア表彰の方々を紹介しました。5年表彰が14名、10年表彰が8名いらっしゃいました。全体報告について研究部長の小林教授から説明がありました。新型コロナ感染下であっても、活発な博物館活動が紹介されました。当館の教員は少ないですが、64名の資料部研究員の協力によって、標本整理や研究などが行われています。「博物館ニュースの出版」「ホームページ、YouTube、facebook」「研究のプレスリリース」といった、研究成果を社会に発信したことを紹介しました。当館は、教育活動にも貢献度が高く、講義や受け持っている院生や学生をはじめ、「ミュージアムマイスター認定コース」「学生による夏季企画展示「藻類の時間軸」展示解説」「学生企画ミュージアムグッズ」「学生企画動画：おいでよ 北大総合博物館～北大生からみた魅力」「動画Museum Guide」「卒論ポスター発表会」「パラタクソノミスト養成講座」を行なってい

ることを説明しました。社会貢献としては、入館者の報告やコロナ対策以外に、「来館者200万人達成記念セレモニー」「夏季企画展：藻類の時間軸～私たちの始まりへ」「トガリネズミ展～今年もみせます!」「宮澤・レーン事件」80周年特別展～事件をめぐる‘出会い’と‘絆’をたどる～」「第2回 建築の学生展」「土曜市民セミナー動画配信」「バイオメテックス市民セミナー」「NHKBS発掘！キャンパス・ミュージアム放送」「バーチャル恐竜博物館オンライン配信」「ボランティア活動」などが紹介されました。その後、北野一平先生から新任の挨拶と研究の紹介、江

田正真毅先生からは家禽の起源について、資料部研究員の新井田清信先生からはマントル形成と地球の歴史について、博物館学院生の谷口加奈子さんからは研究の紹介、昆虫ボランティアの山本ひとみさんからはボランティア活動についてお話をいただきました。多くの方に参加いただき、活発な意見交換がされ有意義な時間を過ごすことができました。

小林快次
(研究部教授/古生物学)



ミュージアムカフェぱらす



アルバイトスタッフとの交流会の様子

「ミュージアムカフェぱらす」は2016年の博物館のリニューアルに合わせて1階入り口横にオープンしました。「からだにやさしい」をコンセプトに、できるかぎり農業や肥料を使わない自然栽培野菜や北海道の素材にこだわって、すべて手作りしています。

運営はさっぽろ雪まつりのボランティアハウスや障がい者支援事業を行っている「特定非営利活動法人手と手」が行っており、提供している料理の仕込みやデザイン業務、事務作業等も

支援事業のひとつとして担っています。

アルバイトスタッフは全員北大生で構成しており、観光で来られるお客様やOBOGの方々と北大に関する情報交換や北大案内などの一面を担っているほか、学部や学年を超えたアルバイト学生同士の交流が行えるのも学生にとっての魅力のひとつとなっています。

学生や職員など日頃学校内にいる方々に日常的に利用していただきたいの思いから、学生・職員割引の商品やお弁当の販売を行い、また一方で北大を訪れる方々にも北大や北海道の魅力や伝えたり、博物館に足を運んでくれる人を増やしたいとも考えています。

北大構内の農場の牛乳を使用したドリンク・フードの提供や北大生が製造したトマトジュースや梅干し、チョコレートなども取り扱い、北大を訪れてきた方々に魅力を広めています。

また、博物館で行っている特別展示と同時期にコラボ商品を開発し、販売などもいくつか行ってきました。これまでには、「惑星地球の時空間」では地球内部の構造を表現した「地層パフェ」の販売や「シマエナガさんの12か月」写真展では「シマエナガソフト」、「K39:考古学からみた北大キャンパスの5,000年」では北大式土器とガ

ラスの装飾具をモチーフとした「タビ土器」の販売を行いました。各メディアからの取材やSNSで話題になり、他県からもこれらを目当てに来館していただけるなど、知名度の向上や来館者の増員に一翼を担えたのではないかと思います。

アルバイト卒業生が学芸員になるといった状況も増えてきており、今後も博物館業界や北大博物館を盛り上げる一員でありたいと心がけていきますので、引き続きよろしくお願ひいたします。

浅野目洋平
(ミュージアムカフェぱらす)



「K39:考古学からみた北大キャンパスの5,000年」で販売した「タビ土器」

2021年度 後期記録

令和3年10月から令和4年3月までに
行われたセミナー・シンポジウム

バイオメテックス市民セミナー
「支笏湖から考える～生態系サービスがもたらす持続可能な社会～第5回：支笏湖と環境問題」
吉本 直人(公立千歳科学技術大学・教授)
オラフ カートハウス(公立千歳科学技術大学・教授)
平坂 雅男(NPOバイオメテックス推進協議会・事務局長)
日時：11月27日(土)13:30～15:30 参加者：30名
(ハイブリッド)YouTube 視聴数：71回

令和3年10月から令和4年3月までに
行われたパラタクソノミスト養成講座

植物パラタクソノミスト養成講座(初級)
首藤光太郎(総合博物館 助教)
日時：10月9日(土)
定員：6名 対象：高校生以上(参加者6名)

きのこパラタクソノミスト養成講座(初級)
小林孝人(総合博物館 資料部研究員)
日時：10月23日(土)
定員：10名 対象：中学生以上(参加者10名)

動物考古パラタクソノミスト養成講座(初級)
江田真毅(総合博物館准教授)
日時：11月13日(土)
定員：6名 対象：高校生以上(参加者6名)

入館者数(令和3年10月～令和4年3月)

	入館者数	見学 団体数	解説の 件数	企画展示(略称)
10月	13,166	休止	休止	
11月	11,968	休止	休止	小さな哺乳類「トガリネズミ展」(11/30～12/19)
12月	7,370	休止	休止	小さな哺乳類「トガリネズミ展」(11/30～12/19)、 「宮澤・レーン事件」80周年特別展 ～事件をめぐる‘出会い’と‘絆’をたどる～(12/4～1/30)
1月	4,055	休止	休止	「宮澤・レーン事件」80周年特別展 ～事件をめぐる‘出会い’と‘絆’をたどる～(12/4～1/30)
2月	4,172	休止	休止	
3月	8,255	休止	休止	卒論ポスター発表会(3/5～3/6)

お礼

以下の方々に当館ボランティアとして学術標本整理作製・展示準備等でご協力いただきました。謹んでお礼申し上げます。(令和3年10月1日～令和4年3月31日)

(敬称略)

●植物標本

井河龍之介、蝦名順子、大原和広、加藤 恵、加藤康子、菊地敦司、木立真凜、木下愛子、児玉諭、駒谷久子、坂上美裕己、嶋崎太郎、須田 節、田端邦子、中川博之、新田紀敏、林 裕子、藤田玲、船迫吉江、星野フサ、堀之内詢大、道川富美子、見原悠美、目黒嘉子、矢野ひろ、山本ひとみ、横山 耕、吉中弘介、吉村遥香

●菌類標本

石田多香子、鈴木順子、谷岡みどり、外山知子、星野フサ、村上さつき

●昆虫標本

青山慎一、伊藤直彦、梅田邦子、柏崎 昭、片倉晴雄、川田光政、喜多尾利枝子、黒田 哲、香村健太、斉藤光信、櫻井正俊、佐藤國男、澤田昌恭、志津木真理子、諏訪正明、高橋誠一、問田高宏、永山 修、廣瀬朋輝、藤田淳一、古田未央、細川真里栄、村上麻季、毛利顕、山本文子、山本そら、山本ひとみ

●考古学

阿部壮太郎、荒谷 博、植松淳子、内田耕平、太田 晶、大泰司紀之、大藪隼平、奥山杏南、川森日向、木村則子、許 開軒、工藤智美、斉藤理恵子、佐々木征一、佐藤亜希子、謝 倩冰、末永義圓、高橋由羽、田中望羽、陳 姿螢、二瓶寿信、丹羽志萌、野瀬紹未、原山法大、堀 隼輔、三ツ橋薫、森本智郎、屋方亮佑、山下真紀、油島明日香、渡辺双葉

●メディア

今野成捷、鈴木陽彦、藤井真知子、矢野ひろ、山田大隆、山本ひとみ

●化石

朝見寿恵、荒山和子、石崎幹男、市橋晃弥、糸井容子、井上竜斗、臼田みゆき、太田 晶、大宮伶、大村 颯、岡野忠雄、尾崎美雪、尾上洋子、金内寿美、川又いづみ、木村聖子、木村映陽、近藤知子、近藤弘子、酒井 実、佐藤健一、高崎竜司、武田満希、田中望羽、千葉謙太郎、寺田美矢子、寺西育代、長瀬のぞみ、比嘉大洋、本村美奈子、前田大智、山角美夏、山下暁子

●北大の歴史展示

高橋道子

●展示解説

阿部壮太郎、在田一則、池田玲菜、太田 晶、生越昭裕、河本恵子、佐々木悠貴、笹谷幸恵、千葉謙太郎、塚田則生、永岡明美、西川笙子、廣瀬由香里、松田義章、村上龍子、山崎敏晴、山田大隆、ロバート・クルツ、渡部典子

●翻訳

ロバート・クルツ

●平成遠友夜学校

柿本恵美、城下洽子、須田 力、田中敏夫、中井玉仙、牧野小枝子、増田文子、山岸博子

●4Dシアター

安部布実子、石神早希、加藤啓子、佐藤伽奈、田中裕子、長谷川健太、平井由実果、平田栄夫、福澄孝博、増田文子

●ポプラチェンパロ

石川恵子、小野敏史、新林俊哉、田中満帆子、新妻美紀、野村さおり、葉山朝世、松田祥子

●図書

岡西滋子、今野成捷、須藤和子、高木和恵、田端邦子、中井稚佳子、久末進一、鮎田久意、本名百合子、村上龍子、森 秀代、山田大隆

●第2農場

石田多香子、稲場良雄、宇井康子、大沼良文、大山圭也、佐々木悠貴、城下洽子、橋爪俊明、山田大隆、渡部典子

●ハンズオン

伊東愛奈、嶋野月江、須藤和子、種市晟子、仲谷優輝、花岡 瞳、濱市宗一、福澄孝博、山岸博子

●展示制作支援

在田一則、伊東愛奈、佐藤淳子、佐藤 豪、塚田則生、西川知浪、平井由実果、廣瀬由香里、松田義章

●きたみてガーデン

新出純平、植松淳子、加藤義典、亀井里和、黒沢邦彦、坂井佑衣、玉田聖司、陳 一恵、富岡那奈子、奈須野恵介、星野愛花里

●水産科学館

天野百花、井黒浩輔、小幡光汰、古庄 誠、杉山友樹、園山萌香、張 逸帆、戸叶太朗、中條希美、中村顕大、中山颯斗、濱田幸穂、樋口淳也、馮婕、皆川裕斗、宮腰太郎、村上詩織、山梨颯太

[表紙写真]
総合博物館正面